

ティーチング・ポートフォリオ

山村学園短期大学子ども学科准教授 室井 佑美

1. 教育の責任

2019年度からの担当科目は（表1）の通りである。

科目名	開講年度	学期	対象学年	種別	受講者数	備考
保育原理	2019 -2026	前期	1年	講義	70/74/67/70 52/59/47/45 名	1クラス
保育内容 人間関係	2019 -2026	前期	1年	演習	35/35・36/37 33/34・35/35 28/24・30/28名 47/45名	2クラス 1クラス(2025～
実習指導Ⅰ	2019 -2026	前期	1年	演習	70/74/67/70 52/58/47/45 名	4または5クラス ※教員4-5名 1クラス(2025～
実習指導Ⅲ	2019 -2026	前期	2年	演習	71/69/67/64 67/47/57/47 名	4クラス ※教員4-5名 1クラス(2025～
保育・教育相談 の理論と方法	2023 -2026	前期	2年	演習	34/33名 23/24名 28/29名 23/23名	2クラス※教員2名
実習指導Ⅱ	2019 -2026	後期	1年	演習	70/74/67/70 52/58/47/45 名	5クラス※教員5名 4クラス※2021迄教員4名 1クラス(2025～
保育内容総論	2021 -2024	後期	2年	演習	34/34・32/32・ 34/33・23/24名	2クラス※教員2名
保育内容人間 関係の指導法	2022 -2025	後期	1年	演習	35/35・23/22・ 28/24名 47名	2クラス 1クラス(2025～
ダイバーシティと 教育・保育	2023 -2026	後期	1・2年	演習	12/17/11名	オムニバス ※教員3名
保育実習Ⅰ	2019	集中	1年	実習	70/74/67/70	

	-2026				52/58/47/45 名	
教育実習Ⅰ	2026	集中	1年	実習	45名	

(表1) 担当科目詳細一覧

(2) 担当する学内分掌

2019年度からの所属委員会及びワーキンググループは(表2)の通りである。

委員会 / ワーキンググループ	年度	役職	構成	職務内容
教務・FD 委員会	2019 -2022	委員長	教員4名 事務1名	・教育課程の編成、実施、評価 ・成績管理、学籍管理 ・資格、免許手続き ・授業運営体制の整備 ・FD活動
	2023 -2025	委員		
実習委員会	2019 -2022	委員	教員5名 事務1名 ※教員4 名事務1 名	・実習指導授業の調整、管理 ・実習体制の編成、実施、評価 ・実習報告会の企画運営 ・保育体験等の企画運営
	2023 -2026	委員長		
学生支援 委員会	2019 -2025	委員	教員4名 事務1名 カウンセラー1 名	・学生動向の把握 ・学生会の運営支援 ・学内行事等の企画運営 ・学生指導(全体、個別) ・カウンセリング業務 ・保護者懇談会等企画運営
経営企画 委員会	2019 -2026	委員	教員6名 事務1名	・学内運営業務 ・方針の検討、実施 ・規程等の管理、運営 ・自己点検・評価

(表2) 担当学内分掌詳細一覧

2. 教育の理念

教育者となって17年が経過した。私自身が教育を学生に展開していく

際に重んじている信念は２点、「自己研鑽に励み成長し続けようとする」と、「自らのストレングスを自覚し、様々な状況乗り越えられる精神を持つこと」である。

自ら学び続けることについて、私は、保育者を目指す者としてだけではなく、人として生涯に渡って「知る」ことに対して魅力を感じて知識を積み続けてほしいと考える。今後、生きていく、働いていくなかで生じる状況を回避することなく、自らの持てる知識を発揮して行動に移せるような「学び」を前向きに捉えられるよう教育を施していくことが理念にある。

また、自ら持つ力を自覚することは、自らを冷静に見つめ洞察することにもつながる。今ある状況を捉えることができれば、何を活用すればよいのか、誰に相談すべきか、どのように向かっていけばよいのか、教育で得てきた知識や経験を総合的に活用できるようになる。「学び」を自らの力になぎ、向き合える精神力が培えるよう教育の中で養うことが理念である。

学生自身が資格や免許を取得するうえでの学びに加えて、現代の社会状況を反映する子どもや保護者、地域の子育て家庭に向き合い、健やかな育ちと最善の利益を生み出す支援を行うために学ぶことを生涯意識してほしいと考えている。

３．教育の方法

（１）保育内容人間関係（授業配布資料一部あり）

保育士及び幼稚園教諭養成課程で必修科目である本科目は、１年生の前期に位置付けられている。保育の内容である５領域の１つを担い、他の領域と共に、１年生の学び始めの段階において、重要な科目である。

2026年度は、子どもの発達に基づく自我の育ち、社会性の育ち、感情の育ちを基礎にしながら、保育者としての求められる関わり演習を交えて授業展開をした。具体的には、①ゲームを通じた人とのコミュニケーションの体験、②遊び活動後の五領域の総合的理解を深めるグループワーク、③視聴覚教材を用いた子どもの理解を深める授業を実践した。

その際、授業展開において留意したことは、いずれの実践も学生へ分かりやすい言葉を選ぶ、体験をする、体験後は個別で振り返る時間を設ける、教員側の学生への意図を伝えるなど、人と直接関わることを意識して学びが得られるようにしたことである。

（２）保育原理（授業配布資料一部あり）

保育士養成課程では必修科目である。保育の根本原理を、保育の意義や

目的、保育に関する法令及び制度、保育所保育指針における保育の基本、保育の思想と歴史的変遷、保育の現状と課題について、授業を展開した。

そこで、2026年度は昨年度授業で使用したパワーポイントを予習資料として挙げておき、当日は今年度分の資料で説明を行うような一部反転授業を行った。また、復習時間も含めてコーネル式ノートにノートテイキングをする形で進め、知識の定着を目指した。毎回のホームワークでは、学生の居住する自治体の実態を調べる、保育に関連する歴史的人物の動画を閲覧するなど、学生にとって身近で取り組みやすく、将来的にも活用できるように主体的な学びが出来るような工夫をした。

その際、授業展開において留意したことは、いずれの実践も学生に学びの意味を明確に伝える、法制度から得られる知識を現場の実際からよりイメージしやすい状況を作り出す、学生のノートにリアクションをするなど、保育にまつわる概説を自分自身の経験に落とし込み、意識して学びが得られるようにした。

4. 教育の成果、評価

2025年後期及び2026年前期の定期試験前に学生に対して授業アンケートを実施した。問4：総合評価、問1：学生自身の取り組み、問2：授業の内容、問3：授業方法はそれぞれ、(表3)のとおりである。単独で担当している科目は、保育原理、保育内容人間関係、保育内容人間関係の指導法の3科目であることから、その3科目を中心に考察を進める。

	保育原理			保育内容人間関係			保育内容人間関係の指導法		
	2026	2025	年度差	2026	2025	年度差	2026	2025	年度差
問4	4.45	4.5	-0.05	4.59	4.6	-0.01	4.7	4.36	+0.34
問1	4.64	4.66	-0.02	4.52	4.5	+0.02	4.55	4.28	+0.27
問2	4.31	4.3	+0.01	4.61	4.6	+0.01	4.60	4.35	+0.25
問3	4.60	4.62	-0.02	4.66	4.65	+0.01	4.77	4.40	+0.37

(表3) 2025年後期/2026年前期授業アンケートの結果一覧

(1) 保育原理

保育原理に関して、学生からの総合評価では2026年は「4.45」、前年度は「4.5」であったため-0.05ポイント下降した結果であった。今年度もコーネル式ノートというノートテイクの手法を取り入れ、講義を進めてきた。自由記述においては、「ついていけない」というその場限りの学びで完結す

ることを望む声もあったが、「事前事後で自分のペースでノートを作れた」「ノートをまとめる力をつけたい」など、考えながら学んでいる声もあった。ただ授業を聞いて写し、試験のために記憶する学び方から得られた情報を活用するスキルを伸ばしたい意図もあり、そういった点ではノートを執る所から改善を図れたため、反転授業にも近いが今後も進めていきたい。

また、動画を細目に入れたことは学生にとって文字化されたものを現実の実態へとイメージを作り出すためにとても効果的だったことが学生の自由記述から分かった。学生が作成した小問題をまとめ、EduNaviに挙げるなど、学生の成果を全体に伝える方法を実施した。

一方でパワーポイントのスライドの情報量が多いこと、スライドに出されている情報を書きながら、授業の説明を聞くため、「話を聞けない」というコメントもあり、コーネル式ノートを写すことのみに注力している実態も明らかになったため、聞く時間が設けられるよう授業内で調整し、学びの定着化が図られるように工夫した活用をしたい。

（２）保育内容人間関係

昨年度の総合評価は「4.6」に対し、2026年度は「4.59」と0.01ポイント下降した結果ではあるが現状維持であった。今年度は集中講義という特殊な授業モデルとして展開したが、自由記述では特に「個別作業とグループ作業の往来」「行事に向けた準備での製作」に関しての記述が多く、体験学習が印象に残っていることが分かった。また、授業展開の方法が講義と演習を口頭意図的に伝えたことで、集中力が切れずに積極的な取り組みにつながったと感じた。

学生からは「講義と演習が分かれていて集中できた」「いろんな人と話せて」「様々な形で体験をして」など、実際の演習を体験して、保育活動と照らし合わせて学ぼうとする姿勢が記述に表れていた。アクティブラーニングとしても望ましい形ができていたため、さらに学生の気付きを学びに変えられるようファシリテーションをするスキルをさらに教員として高めていく必要があると感じた。

教材や資料の活用について、特にテキストを意識的に活用することができた。しかし使いこなしているとは言えず補助資料になっているため、補助資料が授業内で効果を発揮できるよう、さらに工夫する必要があると考える。

（３）保育内容人間関係の指導法

保育内容人間関係の指導法は、総合評価が 2024 年度「4.6」、2025 年度「4.36」、2026 年度「4.7」と動いており、今回は過去で一番高い数値となった。

「人間関係の指導法の実際」として、教育実習Ⅰや保育実習Ⅰが控えていることから、指導案の作成方法を中心に、活動展開における説明（言葉選び、伝え方、話す順序とタイミング、聴く姿勢）を指導した。また、今年度は前期の「保育内容人間関係」同様集中講義であった。さらに、集中講義になったことにより Yamamura Julha Julha の 1 年生企画、実践をすることもなくなった。そのため、大きな授業展開の変更が余儀なくされたが、その分、保育実践と指導案の実際を体験しながら学べるよう進めることができた。加えて園外保育における実地踏査を行った。その際、グループメンバーの姿をドキュメンテーションにして残すことを課題として、1 つの活動で複数の意図をもって活動に取り組む経験をしてもらった。教員は適宜必要な知識やヒントを提供することや、学生間の意見をファシリテートしていくような関わりを持ち、主体的な対話的な深い学びをするきっかけを作り、1 年生後期としては相応の学びができたと考える。

地域のこども園の年長児が来学し交流を行う活動にもグループ単位で本学の自然を生かした遊びを展開させ、指導案立案へもつなげた（インフルエンザ流行により当日の実現は叶わなかった）。しかし、事前に安全管理、遊びの展開をグループ内で検討し、実際に子どもの反応を見ながら臨機応変に対応をしていくことを体験しながら学び、指導案の評価へとつなげることができた。

5. 教育の改善に向けた今後の目標

（1）保育原理

短期的目標	・第一に、保育・幼児教育の関する法制度は日々改訂が行われているため、教員として動向を把握し学生にタイムリーに提示できることである。 ・第二に、日本の保育・幼児教育に加え、海外の保育・幼児教育により関心が向くような教授内容を考えていけるよう資料の提示や視聴覚教材を準備することである。 ・第三に、外部講師の活用を取り入れていくことである。保育者として保育の根本を伝えていく、歴史的変遷、法制度の概要を伝えていくことに加え、今を映すタイムリーな保育・幼児教育の動向について、先駆的な事例を実践して
-------	--

	いる人から学べるようにしたい。
長期的目標	保育・幼児教育の動向は日々一刻と変化を辿っているが、同時に子ども・保護者、取り巻く社会の環境も社会情勢の影響を受けながら変化をしている。保育原理は先人たちが築き上げてきた知の財産を教授することができる科目であるが、保育学としてまだまだ研究しきれていない学問の一部でもある。保育士養成の根本科目としての位置付けの重要性を認識しながらも、「研究」という視点を持ち、これから求められていく保育・幼児教育の動向を追い求めていけるよう、教育者自ら学び、研究成果を示していくことが目標である。

(2) 保育内容人間関係

短期的目標	・ 第一に、人間関係を発達心理学、社会学、民俗学など多様な学問領域から把握し、学生に提示できることである。 ・ 第二に、日本人の民族性や文化を大切にしながらも、多文化共生社会のなかで、多様性のある保育・幼児教育を受け止めていけるよう、関心が向くような教授内容や資料の提示、視聴覚教材を準備することである。 ・ 第三に、保育現場での実際を定期的な観察実習などを活用して保育内容人間関係の理解を進めていくことである。教員として保育内容の根本や人間関係で育むものを伝えていくことに加え、子どもの実際をタイムリーに観察し、捉えたものから学びにつなげられるようにしたい。
長期的目標	保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が近々改訂となる。保育・幼児教育として子どもを育むための根本的要素は変わらないものの、少しずつ社会の状況に合わせた人と人の関わりあいも求められてくる。加えて、多様性を認めていく時代にもなっていくことから、保育者として受容しながらも、何が人との関係性で大切かを自ら選びとっていくことが求められると考える。そこで、保育者としての「筋が通っている」ことを保ちながらも、「変化を受け入れる柔軟性」が持てるような学びが得られるようにすることが目標である。その

	ために、教育者として「保育現場」から教えられる「子ども」から教えられる視点を忘れず、教育者自ら学び、実情を捉え続けていくことが目標である。
--	---

(3) 保育内容人間関係の指導法

短期的目標	・第一に、保育内容人間関係の授業内で得られた知識を基礎に、他科目での知識や技術も交えて多様な学問領域から把握し、学生に提示できることである。 ・第二に、指導法を行うためには自ら子どもと同様な体験を行い、子どもの感性や視点に寄り添った上で、指導内容や指導方法を検討できるような授業展開することである。 ・第三に、保育現場での実態を定期的な観察実習などを活用して、指導案の作成方法を理解させ実際に構想して立案できるようにしていくことである。子どもの実態をタイムリーに観察し、捉えた判断から活動につなげられるようにしたい。
長期的目標	保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は近々改訂がされる。保育・幼児教育として子どもを育むための根本的要素は変わらないものの、少しずつ社会の状況に合わせた人と人の関わりあいも求められてくる。加えて、多様性を認めていく時代にもなっていく。子ども主体の保育を追求できるような自己内省を求めているようにすることが第一の目標である。そのために、保育者として現状を周囲の資源、子どもの姿を受容しながらも、人との関係性を育むために何が大切かを自ら選びとっていくことができる判断力を醸成したい。そこで、保育者としての「筋が通っている」ことを保ちながらも、「変化を受け入れる柔軟性」が持てるような学びが得られるようにすることが第二の目標である。

6. エビデンス一覧

(1) 各科目シラバス

① 保育原理、② 保育内容人間関係、③ 保育内容人間関係の指導法

(2) 授業時配布プリント(一部)

① 保育原理、② 保育内容人間関係、③ 保育内容人間関係の指導法

(3) 試験問題

①筆記試験（保育原理）②レポート試験（保育内容人間関係、保育内容人間関係の指導法）

(4) 成績集計結果（保育原理、保育内容人間関係、保育内容人間関係の指導法）

以上